OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	アスペクト・テンス体系とテクスト : 現代日本語の時間の表現
Author(s)	工藤, 真由美
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/41076
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【 10 】

氏名	工藤 真由美
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	第 14254 号
学位授与年月日	平成11年2月12日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	アスペクト・テンス体系とテクスト —現代日本語の時間の表現—
論文審査委員	(主査) 教授 真田 信治 教授 土岐 哲　助教授 渋谷 勝己

論文内容の要旨

本論文でいうアスペクト・テンス体系とは，単語の文法的形式〈スル，シタ，シテイル，シテイタ〉のパラディグマティックな対立のなかに刻印された時間的カテゴリーのことであり，テクストとは，発話主体による現実の使用のなかにある文の有機的つながりのことである。この両者の関係を双方向的に追究することが本論文の目的であるとする。

本論文は，I-V章に「はじめに」「おわりに」を加えた7部構成になっている。

「I　序論」では，本論文における具体的記述の前提となる基本的骨組みを述べるとともに記述範囲の限定を行っている。

「1　テクスト・文・単語」では，分析のレベルとして，テクストレベル，文レベル，単語レベルの3つを区別する。

「2　テクストレベルの2つの側面」では，〈はなしあい〉と〈かたり〉という大きく2つのテクストのタイプ，ならびに〈タクシス〉という複数の出来事間の時間的関係というカテゴリーを提示する。

「3　文レベルの2つの側面」では，〈時間的限定性〉〈アスペクチュアリティー〉〈テンポラリティー〉という形態論的，構文論的，単語派生的，語彙的手段の複合からなる機能・意味的カテゴリーを概観する。

「4　単語レベルの2つの側面」では，文レベルの機能・意味的カテゴリーとは区別して，単語レベルにおける形態論的カテゴリーとしての〈アスペクト〉〈テンス〉についての規定を行う。同時に，アスペクト的意味の記述にあたって，動詞の語彙的意味の分類（動詞分類）が必要であるとし，アスペクト対立のある〈外的運動動詞〉，アスペクト対立のない〈静態動詞〉，そして，その中間にある〈内的情態動詞〉に大きく3分類するとする。

「5　他のカテゴリーとの相関性」では，接続関係，ムード，ヴォイスという他の文法的カテゴリーとアスペクト・テンスとの関係を概観する。

「II　アスペクトとテクスト」では，スル（シタ）とシテイル（シテイタ）のパラディグマティックな対立としてある現代日本語のアスペクトは，他の出来事との外的時間関係のなかで，運動内部の時間的展開の姿をとらえるものであって，テクストにおける複数の出来事間の時間関係であるタクシスを表し分ける機能を持つことを述べている。

「1　完成相と継続相の対立」では，奥田靖雄の論を継承しつつ，「飛行機が墜落した。救急車が来た。怪我人を運びだした」と「飛行機が墜落していた。救急車が来ていた。怪我人が連びだされていた」の違いに見られるように，基本的なアスペクト的意味とタクシス的機能が，次のように相関することを確認する。

スル（シタ）　　完成性　継起性

シテイル（シテイタ）　継続性　同時性

同時に，動詞の語彙的意味（アクチオーンスアルト）と相関しつつ，〈完成性〉〈継続性〉というアスペクト的意味のバリアントが生じることを指摘する。

「2　パーフェクト相」では，まず，シテイル形式の派生的意味として，「先行する時点における運動の完成性と後続する時点＝設定時点における運動の結果あるいは間接的効力の現存，の両方を複合的にとらえるアスペクト的意味」と定義すべきパーフェクトが存在することを確認・記述する。そして，このアスペクト的意味は，テクスト的機能としては，〈時間的後退性〉というタクシスを実現することを，具体的使用例に基づいて実証する。続いて，〈現在パーフェクト〉だけはシテイル形式のみならずシタ形式でも表現されることを記述し，シタとシテイルの比較対照を行う。シテイル形式による現在パーフェクトのテクスト的機能は，「話し手の現在の判断を根拠づける」「話し手が現在問題としている過去の出来事について聞き手の説明を求める」というような〈解説性〉が特徴的であるとする。同時に英語のような言語における現在パーフェクトとは異なり，シテイルの現在パーフェクトは，「去年，昨日」のような過去時を明示する時間副詞と共起しうる点にもあるとする。

「3　反復相」では，パーフェクトと同じく派生的意味としてある反復性の概念を提示する。反復性の特質は，要素としての運動は完成的にとらえつつ同時にその集合としての運動は継続的にとらえるという複合性にあるが，その継続性には時間的抽象化（ポテンシャル化）が伴っているとする。従って，そのテクスト的機能はアクチュアルな出来事に対する〈背景的説明〉になることを述べる。

「III　テンスとテクスト」では，発話行為の場に直接的に関係づけられているか否かによってテクストを〈はなしあい〉と〈かたり〉に大きく2分類し，どちらのテクストのタイプで使用されるかによって，テンス形式の意味・機能が異なることを明らかにしている。

「1　2つのテクストのタイプ」では，日常会話を代表例とする〈はなしあい〉では，スル（シテイル）形式とシタ(シテイタ)形式とのテンス対立が，発話行為時を基準軸としてダイクティックに対立するがゆえに，基本的に相互の交替現象は起こらないことを確認する。一方，三人称小説の地の文を代表例とする〈かたり〉のテクストでは，主導時制形式は過去形（シタ，シテイタ）でありつつも，時間的意味の変更を伴わずに，非過去形（スル，シテイル）が頻繁に使用されることを確認する。

「2　はなしあいのテクストにおけるテンス」では，まず，〈終止〉の位置では発話時を基準軸とする絶対的テンス対立になることを記述した上で，このテクストのタイプでは，テンス形式が8つのモーダルな意味・用法を持つようになることを，動詞のタイプならびに構文的条件と関係づけて述べる。この8つの意味・用法は，発話行為主体の心的態度そのものである点で，〈はなしあい〉のテクストにおける現象であるとする。

「3　かたりのテクストにおけるテンス形式」では，三人称小説の地の文を，「外的出来事の提示部分」「内的意識の提示部分」「解説部分」に分けて，それぞれにおけるテンス形式の機能を考察し，次の3つの機能は〈かたり〉における現象であるとする。第1に，〈はなしあい〉と違って，過去形と非過去形は，出来事時を基準軸とする相対的テンス対立を実現する場合が起こる。第2に，「外的出来事の提示部分」では，かたりの時間的前進性（継起性）を表すのは，基本的にシタであるが，同時性の場合には，作中人物の知覚体験を明示するために，シテイタ（過去形）ではなくシテイル（非過去形）の使用が生じる。第3に，「内的意識の提示部分」では，作中人物の独白の直接的再現か間接的再現（描出）かという視点の取り方の相違によって，非過去形と過去形の使い分けが生起する。

「4　ノンフィクションのテクストにおけるテンス形式」では，体験的ノンフィクションと非体験的ノンフィクションに分けて，過去形がダイクティックな機能を残しつつ，非過去形が発話主体の感情・評価性を前面に出さずに文体的に使用されることを指摘する。

「IV　時間の従属複文」では，時間の従属複文の体系を提示した上で，従属文化という構文的条件の変更に伴って，スル，シタ，シテイル，シテイタという形式が，主文の述語の場合とは異なるアスペクト・テンス的意味を持つようになることを記述している。

「V　愛媛県宇和島方言のアスペクト体系」では，標準語とは異なるアスペクト体系を持つ方言を取り上げる。この方言では，スル〈完成相〉-シヨル〈不完成相〉-シトル〈パーフェクト相〉の3項対立としてのアスペクト体系があるとした上で，動詞を〈内的限界動詞〉と〈非内的限界動詞〉に分類し，標準語との比較対照ならびに一般アスペクト論との関係を考察している。

論文審査の結果の要旨

本論文は，現代日本語における時間の表現の中心的手段・内容をなすアスペクト・テンス体系と，テクスト的機能との有機的相関性を追究したものである。本論文の中心的部分は，アスペクト，テンスをテクストとの関連を含めて取り上げたIIとIIIの章であるが，時間の従属複文を取り上げる章や，宇和島方言を取り上げる章を含み，研究の理論的な深さとともに研究対象の幅の広がりを有する。まさに日本語アスペクト・テンス研究に大きな足跡を残す大作である。

研究史的には，奥田靖雄，鈴木重幸，高橋太郎による形態論的なアスペクト・テンス研究のパラダイムを受け継ぎつつ，さらにアスペクト，テンスのテクスト的機能を研究対象に加え，新たな展開を試みるものとして位置づけされる。

本論文の特長の一つは，実際の使用例に基づくアプローチをとっていることである。テクスト型として〈小説の会話文，地の文（三人称小説，一人称小説），紀行文，ルポルタージュ，歴史的論述文〉を中心に緻密な分析が行われている。豊富な実例に支えられた興味深い観察が随所に見られるが，特に「テンスとテクスト」の章は注目される。ここでは，発話行為の場に関係づけられた「はなしあい」と，「ル/タ」の交替現象が起こるなどの特色をもつ「かたり」といったテクストのタイプが議論の中心になっている。

まず，「はなしあい」では，モーダルな意味との関連づけがなされている。(1)「腹がへった」のような，内的情態動詞一人称での「シタ」による感情感覚表出，(2)「ちょっと待った」の要求，(3)「ほら，やっぱり一していた」のような発見と想起，(4)遂行動詞による実行，(5)「あきれるわ」のような態度，感情感覚の表明（「あきれた」にくらべて能動的だと指摘する）(6)直接的知覚の表出，「いやに鳴るな」のような話し手の主観的態度の表明，(7)記憶の生々しさを伝えるいわゆる歴史的現在，といった意味が挙げられている。そして，これらの意味は，発話行為の場への志向性を表すのであり，「はなしあい」というテクストにおける現象だと述べられている。これまでの研究では，ともすれば「シタ形の意味」あるいは「スル形の意味」という形で，さまざまな用法が羅列されることも多かったのだが，ここでは，発話の現場的な意味によるものと「かたり」などによるものとが峻別され，豊富な実例とともに詳細に整理されている。

次に，「かたり」では，主導時制形式が過去形であるが，それは「叙事詩的時間」の提示であり，テンス形式はダイクティックな時間関係でなくタクシス関係の提示として機能する，と述べられている。この「かたり」の特性は，三人称小説の地の文に典型的に現れる，とする。

なお，ノンフィクションについても言及がある。ノンフィクションでは，過去形が現実の発話行為に対する回想的過去というダイクティックな機能を残しつつ，非過去形が文体的に使用される一方，発話主体の「感情・評価性」がない。この点で，「はなしあい」「かたり」とも違うという。さらに，ノンフィクションは，ルポルタージュなど発話主体の直接体験した過去の事実をいうタイプと歴史叙述のような非体験的なタイプとに分類される。前者では，「今」のような副詞が出来事時基準で示され，現場的同時性という効果が生み出される一方，後者では，年表的提示というべき用法があるということなどが，実例とともに示されている。このようなノンフィクションのテクストの時間的な

分析はほとんど手付かずであったと思われる。この点，高く評価されるべきであろう。

ただし，ここで取り上げられているのは散文だけである。小説などの散文では，主導時制は過去であるが，韻文の場合は違う。韻文ではむしろ超時的現在といいたくなるような「詩的世界」を構築することがある。今後，こうした領域の文章についても，テクストの在り方と関連した分析をすることが課題になろう。しかし，その場合でも，本論文の研究成果は不可欠な出発点として極めて重要な価値を持つと考えられる。

本論文は，21世紀の新たなアスペクト・テンス論の始まりであり，博士（文学）の学位を授与するに十分値するものであると認定する。